

強気相場は悲観のなかに生まれる 日経平均のゴールデンクロス(買いシグナル)

日経平均の週足チャートを見ると先週末時点で 13 週移動平均が 26 週移動平均を下から上に突き抜けるゴールデンクロス(GC)を達成した。短期の移動平均、例えば 25 日と 75 日などはダマシが多く、逆にそこが目先の天井となったりもするので使えないが、週足の 13 週と 26 週移動平均の GC はダマシが少ない。そもそも、そう頻繁に示現するものでなく有効性が高いシグナルだ。

日経平均の推移(週足・2012 年 9 月～)



(出所)Bloomberg

13 週 26 週移動平均の GC はアベノミクス相場が始まって以来、2 回目のことだ。前回は 14 年 7 月。当時 1 万 5000 円だった日経平均は 2 万円越えまでいった。アベノミクス相場が始まる 1 か月前の 12 年 10 月にもこの GC が示現している。そこから大相場が始まったのはご記憶の通り。日銀のレジームチェ

ンジで気迷い気味に映る日本株相場だが、実は静かに新たなステージに入りつつあるのかもしれない。

GC の示現は、12 年 10 月、14 年 7 月、そして今回 16 年 9 月と 2 年周期。そして 12 年と 14 年の 12 月には解散総選挙があった。今年も 12 月にロシアのプーチン大統領と安倍首相の会談が予定されている。もしも北方領土問題になんらかの進展がみられた場合、余勢をかって解散総選挙になだれ込む可能性は十分ある。さすがに師走の総選挙は日程的に無理でも、年明け早々はありえるだろう。自民党が通常は 1 月開催の党大会を 3 月 5 日に開くと決めたことで、永田町では「1 月解散説」が信憑性を増している。

その頃には米国の大統領選も 12 月の FOMC も終わり不透明材料は減少している。北方領土問題の進展は日本を明るくするだろう。政権基盤の安定化は株式市場に好材料で外国人買いを呼び込むきっかけになる。このシナリオが示現した場合、アベノミクス相場の上昇局面第 3 幕のスタートとなる可能性はじゅうぶんあるだろう。

この 13 週 26 週移動平均の GC が出るときは、どうしてそのタイミングで買いシグナルが灯るのかわからないケースが多い。その時点では相場環境の改善が実感できないのである。例えば、12 年 10 月などは相場には閑古鳥が鳴き、日経平均は 8000 円台に沈む低迷ぶりだった。誰もその 1 カ月後から大相場が始まるなんて予想できなかった。

2014 年もひどい幕開けだった。アベノミクス相場実質 1 年目となった 2013 年が記録的な上昇を演じ年末高で幕を閉じた反動もあって、2014 年は 1 月から 4 月まで 4 カ月連続安。日経平均の月別騰落率は新年始まりの 1 月が最もパフォーマンスが良く、2 番目は年度始まりの 4 月である。ところがこの年は 1 月が 1300 円超の下落、4 月が 500 円超の下落となってワースト 1 位と 2 位である。1 月から 4 月まで 4 カ月連続安のあと「セル・イン・メイ」のはずの 5 月に反発した。おかしな表現になるが「通常のアノマリー」の逆である。日経平均は若干の押し目を入れながらそのほぼ 1 年後の高値 2 万円越えまで息の長いラリーとなった。

今、振り返れば 2014 年 6 月の「日本再興戦略改訂 2014」がコーポレートガバナンス改革の先鞭をつけたわけだが、当時はそれほど騒がれてはいなかった。実はその直後に日経平均には 13 週 26 週移動平均の GC という買いシグナルが点灯していたというわけだ。

今年も年初から大幅安で始まった。1月2月と連続して1,500円前後の下落となった。今年も「セル・イン・メイ」はなく5月は500円超の上昇となったが6月はBREXITで大幅安。通常の年は前半のパフォーマンスが良く、後半が悪い。だが今年には既に前半で大きな下げを何度も経験している。2014年に見られた「通常のアノマリー」の逆パターンとなるのではないか。

だが、それこそが過去2回のGC発生と同じような環境にあるということだ。足元の環境は、米国大統領選挙の行方、ドイツ銀行の経営不安、米国は果たして利上げできるのか、そして日銀の金融政策は有効に機能するのかといった不透明材料が多くリスク回避の円高が進んでいる。ドル円相場は100円割れ目前だ。こんな状況でのゴールドデックロス、買いシグナルだと言われても俄かには信じられないのも無理はない。

しかし、過去2回、2012年と2014年にゴールドデックロスが示現したあとは、いずれも大相場につながった。その時も相場環境は決して明るくなかったが、後で振り返ればそこが相場上昇の起点だった。「2度あることは3度ある」、あるいはその逆で「3度目の正直」になって今回は不発に終わるのか。ひとつだけ確かなことは、本当の強気相場は悲観のなかに生まれるということだ。悪材料ばかり目立ち、市場に悲観論が蔓延しているときこそ、あとから振り返れば、そこが大相場の起点だった、ということは往々にしてあるものである。

ご留意いただきたい事項

当社は、本書の内容につき、その正確性や完全性について意見を表明し、また保証するものではありません。記載した情報、予想及び判断は有価証券の購入、売却、デリバティブ取引、その他の取引を推奨し、勧誘するものではありません。過去の実績や予想・意見は、将来の結果を保証するものではありません。提供する情報等は作成時現在のものであり、今後予告なしに変更又は削除されることがございます。当社は本書の内容に依拠してお客様が取った行動の結果に対し責任を負うものではありません。投資にかかる最終決定は、お客様ご自身の判断と責任でなさるようお願いいたします。本書の内容に関する一切の権利は当社にありますので、当社の事前の書面による了解なしに転用・複製・配布することはできません。内容に関するご質問・ご照会等にはお応え致しかねますので、あらかじめご容赦ください。

利益相反に関する開示事項

マネックス証券株式会社は、契約に基づき、オリジナルレポートの提供を継続的に行うことに対する対価を契約先金融機関より包括的に得ておりますが、本レポートに対して個別に対価を得ているものではありません。レポート対象企業の選定はマネックス証券が独自の判断に基づき行っているものであり、契約先証券会社を含む第三者からの指定は一切受けておりません。レポート執筆者、並びにマネックス証券と本レポートの対象会社との間には、利益相反の関係はありません。

マネックス証券株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第165号
加入協会: 日本証券業協会、一般社団法人 金融先物取引業協会、一般社団法人日本投資顧問業協会